

訳註

- (1) フランスにおけるドイツ人亡命者中の急進分子が一八三六年パリに結成した秘密結社。一八三九年フランスから追われたのちはロンドンで活動をつづけた。マルクスとエンゲルスは数年前からこれに接触していたが一八四七年正式に加入した。その年六月の第一回大会で「共産主義者同盟」と改称。いうまでもなく『共産党宣言』はこの同盟の綱領である。
- (2) バウル・ティリッヒ(一八八六—一九六五年)はドイツの神学者、哲学者。のちにアメリカに帰化し、アメリカ神学界の代表的思想家と目されている。ブーバーから多くの影響を受け、またブーバーについて数篇の論文を発表している。プロテスタント神学にたいしてもブーバーの意義もきわめて高く評価し、その哲学は正統派神学および自由神学とともに越える途を指し示すものと見ている。ティリッヒもまたキリスト教的社会主義を唱えてはいるが、どのような理由からここで「マルクス主義的」とよばれるのかは不明である。
- (3) エドゥアルト・ハイマン(一八八九年—)はドイツの経済学者、社会政策学者。一九三三年アメリカに亡命し、現在 Graduate School of New School for Social Research の教授。いわゆる民主主義的社会主義に立っているが、マルクス主義にも深い理解を抱いていると見られる。
- (4) この往復書翰は頗る有名であって、ブルードンに関する書物にはほとんどきまったように引用されている。全文はその『一革命家の告白』(一九二九年新版)の附録に収められ、またとくにマルクスとブルードンとの交渉をあつかった Pierre Hautmann, Marx et Proudhon, 1947 ではこれに種々註釈

を加えている。マルクスの手紙(一八四六・五・五)には、カール・グリュンを「詐欺師」を罵るフィリップ・ジゴーなる人の後書とエンゲルスの協力懇請の後書がついており、ブルードンの協力を求めることのほかに、グリュンをブルードンから遠ざけることが意図されたといわれる。ブルードンの返事(五・十七)はかなり長文でグリュンを心から弁護している。とにかくこれらの手紙は、いろいろの点で二人の性格のちがいや社会主義に対する考え方の大きな隔りを示しており、甚だ興味深くかつ重要なものを含んでいる。

(5) オットー・フォン・ギルケ(一八四一—一九二二年)は改めていう必要もないほど高名なドイツの法学者。とりわけ団体法の研究に大きな業績をのこした。プーバーは、ギルケにおける協力団体と支配団体、また社会と国家の対立の考えやなお中世社会の見方について、テンニースからと共に、多くをとりいられているように見られる。

(6) イヴァン・ヴァシリエヴィッチ・キレーエフスキーはスラヴ主義に立つ十九世紀ロシアの批評家。主著は『ヨーロッパ文明の特質とそのロシア文明に対する関係』(一八五二年)であり、引証はおそらくこの書物を指すものと思われる。

(7) 「アナキズム思想の最近の偉大な代表者」(エリッヒ・フロム)、「精神的巨人」(ルドルフ・ロッカ)、「ドイツ革命の最もりっぱな人物、最も偉大な精神の一人」(エルンスト・トルラー)などとよばれるグスターブ・ランダウアー(一八七〇—一九一九年)のことは、日本ではほとんど知られていないように思われるが、しかも彼はプーバーの親しい友人であり、また本書でもわかるように思想的にも深いつながりがあるので、少しくわしく紹介したい。

ランダウアーは南西ドイツでユダヤ系中産家庭に生れた。学生時代社会民主党に加わったが、一八九一年異論派の青年たちとともに追放された。このグループがベルリンで発刊した週刊「デル・ゾチアッ

スト」は、ランダウアーの編集の下にやがてアナキズム宣伝紙に変じた。その後ランダウアーはアナキストとして国際的舞台に活動するとともに、一九〇八年自ら「社会主義同盟」を結成して実際運動にしたがった。

一九一八年十一月ミュンヘンでバイエルン共和制が宣言され、独立社会党派のクルト・アイスマー政府がつけられたとき、ランダウアーは詩人エリッヒ・ミュンザムその他とともに「革命的労働者評議会」を組織してそれに対抗した。翌年二月アイスマーが殺され、社会民主主義者のヨハン・ホフマンが後をついだが、労働者の不満は強く、ミュンザムのミュンヘン労働者兵士評議会に対する提議が、スパルタクス団を含む反対七〇票を圧して二三四票の多数で採択され、ここに第一次の評議会共和制が宣言された。その中央評議会の中心人物はランダウアー、ミュンザムおよびランダウアーの影響を強く受けていた劇作家のエルンスト・トルラーであった。共産主義者はこれを「偽ソヴェト」として攻撃し、代ってレヴィネの下に第二次革命政府をつくったが、バイエルンは時あたかも侵入し来ったノスケ軍十万のじゅうりんするところとなって、約七百人が捕えられ、多くの者が虐殺された。五月一日夜逮捕されたランダウアーは翌朝監獄の庭に引きだされ、軍人の群に「獣の如く」惨殺されたという。ミュンヘンに建てられていた記念碑や遺跡はナチ時代破壊されたが、手稿文書は一九三九年遺族の手から危くアムステルダム「国際社会史研究所」に移されたと伝えられる。

ランダウアーはこのように活動的な革命家として生涯を過ごしたが、一面はおよそ政治家というには遠く、むしろ学者者であった。その方面ではとくに中世神秘思想家の研究、またシエクスピアやホイットマンの研究でも知られた。社会思想家としては本書で明かなようにとりわけブルードンおよびクロポトキンに近く、クロポトキンの『相互扶助論』やたしか『フランス大革命史』を独訳した。マルクス主義に對しては「時代のペスト、社会主義運動の呪い」という烈しい言葉で斥けている。著書には、私の知る

だけでも数冊の小説のほか次のものがある。Die Revolution, 1907; Skepsis und Mystik; Aufbruch zum Sozialismus, 1911; Der werdende Mensch, 1921; Beginnen, 1924. 後二つはブーバーの手による出版である。なおランダウアーの生涯についてはブーバーによる Landauer, G., Sein Lebensgang in Briefen, 1929 がある。またブーバーのランダウアー追憶の一文(一九二九年)によると、ブーバーは一九一九年当時その身辺におったようであるが、その文章はこう結んでいる。「ランダウアーは革命のなかで革命のために革命に反対して闘った。革命はこのことで彼に感謝しないであろう。しかし彼と同じように闘った人々は彼に感謝するであろうし、またおそらくいつかは、彼がそのために闘った人々も彼に感謝するであろう。」

(8) ランダウアーの思想の一端を知るための参考として、この「社会主義同盟」規約の他の条文をあげることにしよう。(Beginnen, SS. 112—114)

- 1 社会主義とは新しい社会の建設を意味する。
- 2 社会主義社会は、個人の自由な結合から成るところの、自主的に経営し、相互に公正に交換を行う共同体の連合体である。
- 3 ついには国家および資本主義経済にとって代るべき社会主義連合体は、志ある社会主義者が生活共同体を結成し、時々の可能性に応じて資本主義経済からの離脱を実行することによってのみ、実現の緒につくことができる。
- 4 手初めとしての社会主義移住地は、消費の共同化と相互信用を貨幣経済に代えることによって準備される。この方法によって、働く人々および経済共同体が、利得者や寄生者なしに生産し、その労働生産物を互いに交換する可能性がたっぷりだされる。
- 5 今日のいわゆる資本は社会主義連合体においては二様のものとなる。すなわち第一は諸制度を形成

し、働く人々を保証する結合の精神であり、……第二は今も資本の一部であり、社会主義連合体においても常に経済の前提条件たるところの土地である。

6 土地の解放と、正義、真の必要および時効のない土地所有権は存在しえないことの承認を原則とする経済共同体への土地の新たな分割とは、民衆の間の社会主義の究極かつ完全な成就のための条件である。

8 社会主義を実現しかつ生活する社会主義者が存在しない限り、社会関係や所有関係の改革のいかなる見込みも存在しない。

9 社会主義は決して国家政治の問題ではなく、また権力闘争や資本主義経済のために働く労働者階級の地位のための闘争の問題でもない。それは物質的關係の変革に限られるものではなく、今日ではまず第一に精神的運動である。

10 アナルヒーは……社会主義の別名にすぎない。真の社会主義は国家および資本主義経済の反対者である。社会主義は自由および自発的結合の精神からのみ生れることができ、個人とその共同体のうちにのみ成立することができる。

11 社会主義の精神が広がり、またそれが人間の真の本性から深く発する度合が多ければ多いほど、人々は、抑圧、愚昧、貧困に導く一切の愚かな制度から一層力強く離反し、強権的権力に代って協約が、国家に代って自由な共同体および団体の連合すなわち社会が一層徹底的に出現する。

12 社会主義連合体建設のさいには不可避的に工業都市から地方へのプロレタリアートの移住、農業、工業および手工業の結合、精神的労働と肉体的労働との合一が行われ、また強い勤労の喜びと共同社会的親密感とが生みだされ、これによってわれわれは共同体と民衆にまで高められる。

(9) 古代アテナイにおけるソロンの改革の一つで「負債破棄令」をいう。

(10) 五十年節。ユダヤ人がカナンの地に入った時から計算して五十年毎の年。この年にユダヤ人は奴隷を解放し、また人手に渡った土地を元の持主に返させたことを指す。

(11) 医師ウィリアム・キング（一七八六一一八六五年）はブライトン協同組合運動の創始者として著名であり、その思想は直接ロッチテール開拓者たちに最も強く影響し、また広くイギリス協同組合の発展に寄与した点でもオウエンにまさるものがあるといわれる。その雑誌「協同者」の全部は次の書物に収められている。T. W. Mercer. Dr. William King and The Co-operator. 1922.

(12) フランス協同組合の「父」フィリップ・ビュシエ（一七九六一一八六五年）の生涯は波瀾に富み、初めバザールとともにカルボナリ派を指導して捕えられ、証拠不十分で釈放された。ついでサン・シモン派に加わり、その雑誌「生産者」に助力したが、やがて別れて一八三一年「ヨーロッパ人」をはじめた。しかしサン・シモンの影響は強く残った。後年ルイ・ブランと活動を共にし、一八四八年革命後少しの間国民議会の議長となった。コールはイギリスのキリスト教社会主義の起りにおよぼしたビュシエの影響を指摘している。著書には *Fessai d'un traité complet de philosophie au point de vue du catholicisme et du progrès, 1839—40* 等の他がある。

(13) 十八世紀中頃南ロシアに起り、正教の教義と儀式を否定する宗派。徹底した平和主義、無抵抗主義を唱え、晩年のトルストイが熱心に援助したことで知られる。一八七九年カナダに移住し、いまま数個の協同組合的共同体をなして生活している。

(14) 十六世紀前葉ヤコブ・フッターがモラヴィアに開いた宗派。一八七四年アメリカに移住し、いままダコタ州、モンタナ州およびカナダの数個所にその五十の共同体が存在するという。

(15) 協同組合の一種。クロポトキンの『相互扶助論』（アシユリイ・モンテギユ序、一九五五年版二七二—四頁）にこれに関する記述が見られる。なおこの言葉は現在ではソ連集団農場の圧倒的多数の型を

示すものとして多く用いられている。

(16) この、いまはイスラエルの協同組合方式による共同村は世界的に有名であり、各国の社会学者や文化人類学者から興味ある研究対象とされ、すでに多くの書物や論文が公にされている。最近では、ともに集団を意味するが、Kvutza (Kvutza) に代って Kibbutz (Kibbutz) の方が広く使われている。成立の事情は本文に述べられているが、要するにユダヤ人の移住に最も適したものであるとして発生してすでに五十年の歴史をもち、数種の形態のなかで最も協同性の度合が高かつ重要な地位を占めているのがキブツである。ブーバーはこれに独自の意義を与えている。

自らそこに住んで親しく研究し、また「国際協同組合社会学研究協議会」を主宰するインフィールドは、今日世界に行われている共同村または集団農場の典型としてソ連のコルホーズ、メキシコのエヒドとこのキブツの三つをあげ、前の二つは国家の政策と行政措置によって作られたのに対し、キブツは全く自発的に生れ自主的に運営されている点にその特徴を認め、ロッチテール開拓者の究極の目標（本訳書一〇四頁参照）を実現したものと見ている。メキシコの農業改革から生れたエヒドは著しく衰退したようであり、今日では当然中国の人民公社があげられるが、それも自発的組織たるにはほど遠いであろう。

著者もこの実験が当面する難関を十分に知り、ただ控え目に「失敗しなかった実験」といっているが、困難はその後発展とともに加わり、それにはブライヴァシイや個人的楽しみに対する要求、とくに婦人たちの欲求不満、指導者の問題、その他の内部的問題のほかに、イスラエル国家の建設（一九四八年）、それに伴う大量移入、さらにアラブ諸国との絶えざる紛争等の外部的事情も大いに与っている。こうした事情は、ブーバーの考えをもってすれば、政治的原理を助長し、社会的原理を阻害することになるであろう。インフィールドは、問題の重大さを認めながら、それはキブツの真の協同性を損うにはいたっていないと見ているが、ときには「キブツの危機」が叫ばれ、論争の的ともなっている。（たとえばアメ

リカの季刊誌 *Dissent*, Spring 1957 における論争)。

キブツについて書かれた書物で一般的なものをおぼゆるは Henrik F. Infield, *Co-operative Living in Palestine*, 1946; — *Co-operative Communities at Work*, 1947; — *Utopia and Experiment*, 1955; M. Weigarten, *Life in a Kibbutz*, 1955; Esther Tauber, *Molding Society to Man*, 1955; M. E. Spiro, *Kibbutz: Venture in Utopia*, 1956.

- (17) 語義は上ること。それから聖地へ上る、巡礼。いまふつうは、パレスチナへの移民の波をさす。アリアは、一八八二年以来建国まで五次にわたっておこなわれた。キブツははじめ第二次(一九〇四—一九一四)および第三次(一九一九—一九二三)の人々によってつくられた。